

---

# 深淵に立つ癒し姫

雁緒 采加

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

深淵に立つ癒し姫

### 【Nコード】

N7250X

### 【作者名】

雁緒 采加

### 【あらすじ】

40歳女が転生を果たしました。ユリアナ伯爵令嬢5歳です。平穏な生活を送る予定だったのに元義理の息子に求婚されました。つて前世から50年たってるはずなのに何故20代なのでしょう？それに息子より5歳の少女に求婚するのも世間的にどうかと思います。

## プロローグ

亡国の王は『力』を欲した。

他国への侵略のため

他国へ自国の脅威を見せつけるため

より多くの富を得るため

戦に続く戦で民は疲弊していた

王のもとに一人の男が現れる

魔導師を名乗る男は告げる

強大な『力』を王の手に献上してみせようよと . . . . .

その為に生贄が必要だった

魔獣の骸、無垢な子供達の魂、そして異邦の乙女の鮮血

魔導師の言いなりに王は次々と生贄を集める

ある者は王を諫め反逆者として処刑され

ある者は己の保身の為子供達を集め生贄に差し出した

国を守るため多少の犠牲は仕方がない王宮に住む者は皆考える

しかし魔導師が示す『力』は王の為のものではなかった

強大な『魔』を生み出す為魔導師は『力』を欲し王を利用したのだ。

だが、魔導師によつて強大な『魔』が生み出されることはなかった。異邦の乙女の祈りにより『力』は共に贄となっていた子供達に渡される

乙女の死と引き換えに . . . . .

彼らは『力』を使い魔導師を滅ぼす

しかし魔導師は己の命をもって『魔』を生み出す陣を発動させる  
陣は大地深く刻み込まれ 力は弱いが多く『魔』が生まれ出てきた

『力』をもってしても滅しきれない『魔』に彼らは仕方なく陣の周りに封印を施す

深い深い森で覆い、『魔』が出てこられぬように、陣が人目にふれぬように

贄として集められた者たちは虐げられた民と共に決起し王家を廃し  
新たな国をつくりあげた

『力』を得た子供の一人が建国の王となる  
新たな王は10歳に満たない少年であった . . . . .

### ユーテリアス国建国記より



## 転生したようです

はじめに感じたのはまぶしい光

それから暖かな温もり

波のようにゆらゆら揺れる体が気持ちよくて瞼をあげれば . . . . .

・・・だれ？この金髪のおじょーさん。

つてゆうかなんでこんなに手が小さいんだ自分。

いや、手だけじゃない、体が思うように動きません、声も出ません。生まれたての赤ちゃんになっっているようです。

どうやら転生というものをしてしまったようです。

- - - - - というわけで

声は「あー」とか「うー」しか出ませんが目と耳は問題ないようです。フル活用した結果。

私の今生の名はユリアナ「フィールゼン」。

アルシャン国の伯爵令嬢だそうな。

伯爵といっても出世に興味がなく領地を村人と楽しく開拓している。こうという父様の意向でのんびりゆったり暮らしているようだ。

両親と数人の使用人と共に王都からかなり離れた辺境の地で暮らしている。

10歳年の離れた兄がいるらしいが王都の学院に入学しているため家にはいないとのことだ。

私が初めて見たきれいなお嬢さんはやはり母様でした。

光り輝く金色の髪とエメラルドの瞳、白磁の肌。

はつきり言つて超人さんです。

10歳の息子がいるとはとても思えません。

特に声がとてもきれいで子守唄など聞いているだけで幸せになつて  
しまいます

ちなみに父様も金の髪、ダークブルーの瞳のイケ面です

まだ自分の顔は見れませんがちょっと楽しみです

前世の記憶が正しければアルシャン国は国民のほとんどが金髪碧眼  
だったはずなので母様の浮気ありえないっがなければ私の髪も金髪のはずでしょう  
もと黒髪、黒目の私としてはうれしい限りです

## 転生前のわたし

ユリアナ3歳になりました

今はベットのうえで絵本をよんでいます。

どうやら私には魔力というものがかなりあるらしく幼い体には負担が大きく熱を出してはベットの住人です。

前世の記憶というのもどうやら悪影響を与えているようで膨大な記憶が幼い脳では処理しきれずショート。

高熱に魔され寝込む。の繰り返し

おかげで3歳までの記憶は曖昧です。

まあ、あまり思い出さないほうが精神年齢40歳のおばさんにはいいような気がします。

ようやく魔力も体に馴染んできて高熱で魔される事もなくなりだし、両親や他の人とも言葉でコミュニケーションがとれるようになり色々な情報が入ってくるようになりました。

どうやら今住んでいる処は前世での私の終焉の地の近くのようにです

私はもともとこの世界の住人ではなかった.....

地球の日本という国で小児科医をしていてあの頃は忙しくても毎日が充実していました

ここに召喚されるまでは.....

もう今はない国の王は『力』を欲したらしい、その為に異世界の住人の生贄が必要だったのだそうだ



突然連れてこられ、閉じ込められた。  
儀式を行うその時まで

でも、そんな愚かな王にもまともな臣下だっている  
国の安寧の為に異界の者が犠牲になる事はないって城から連れ出し  
てくれた

元の世界には戻せないが守ってやる . . . . .と

召喚の時に魔導師に付けられた印によって私はこの国を出る事が出  
来なかった。

彼は国の辺境にある友人の元に私を連れて行ってくれた  
力のある術師らしく、彼の息子（いや、息子がいた事にはびっくり  
した）を預けていたらしい。

私に付けられた印を消すことはできなかったが感知されないように  
封印してくれた

それから数年は平和だった

辺境の村までは追手が来る事はなく。私は彼にプロポーズされ、い  
きなり8歳の子持ちになっちゃったけど本当に幸せだった。

魔導師あいつが来るまでは . . . . .

突然村に現れた魔導師は次々と村人を殺して行った  
村の子供たちと私は儀式に必要なだからと捕えられた  
彼も戦ったが魔導師の手によって殺されてしまった  
私たちの目の前で . . . . .

魔導師は儀式を行うと言って陣を描き始めた

私にはなんの力もなかった。魔導師を阻止する事も子供たちを守る  
事も

せめて子供たちだけでも守りたい！

.....そう願った

魔導師の作りだす刃が私の胸に突き刺さって、あたり一面に鮮血が飛び散り大地に書かれた陣が輝きだした

かすれゆく視線の先には真つ青な顔で泣き叫ぶ息子あの子がいた

.....ごめんね、巻き込んでしまつて。守れなくなつて。

それが私が覚えている最期

それからの事は転生してから知つた

この絵本もその一つ

50年前に起きたこの事件をもとに書かれた英雄王物語

あの子たちは「力」を得て魔導師を倒したそうだ

そして虐げられた民の為に新たな国を創つた

あの時にいた息子あの子の幼馴染の二人がユーテリアスの初代王、王妃となつて子供達までいるんだそうだ

風の噂では国は安定し、国王夫婦の人気はすさまじい程なのだそうだ  
つらい過去だけど今、みんなが幸せであつてくれればうれしい

しかし息子は表舞台にはあまり出てこないらしく、今どうしているのか分かつていない

一体どうしているのか、少し心配です

義母ははとしてはもう少し大きくなつたら様子を見に行きたいものです



## 母はどの世界でも強いのです

「まあユリアナ、またその絵本を読んでいるの？」

今日もベットの住人となった私の様子を見に来た母様は呆れ顔で手元の絵本に視線を向けてきた

「はい、おかあさま。だって、えいゆうおうさまたちかっこいいです」

なるべく三歳児っぽく、かわいくかわいくと心に念じながら笑顔で返事をします

「本当にユリアナはそのお話が大好きね」

ええそりゃあもう！

だって3歳児じゃあこの絵本ぐらいしか彼らの事を見る事ができません

子供向けにはなっています但本人たちをちゃんとモデルにして書かれているようで赤髪の戦士、銀髪の英雄王、精霊王妃はあの子達の顔を思い起こさせます

赤髪のやんちゃな息子、ガーディアル。知的で頑張り屋のライナス。おっとりしたやさしいレイティ。

「でも絵本はお熱が下がってからにしましょう」

母様は絵本をサイドテーブルに置くと私をベットに横たえると子守歌を歌ってくれます。

子守唄を歌う時の母様の瞳はエメラルドの瞳の中に金色の輝きが見えます。

歌も素敵なのですがこの瞳がとても綺麗で私はいつも瞳を眺めてしまいます。

最近知った事なのですが、この輝きは癒しの力を使う時に現れるもので母様は子守歌を歌いながら私の体調が少しでも良くなるようにしていてくれたのです。

あ、ちなみに私の髪も金色で瞳は青と碧を混ぜたような色でした  
母様似の顔のおかげで自分で言うのもなんですが中々の美人になるにはと思っております

思わず鏡の前でガッツポーズをして侍女に変な目で見られましたが・

「リステリア、ユリアナは眠ったかい？」

ノックと共に父様が入ってきました。

まだ眠くはないのですがとりあえず寝たふりをします

「ええ、あなた今眠ったところよ」

母様と入れ替わり今度は父様が頭をなでてくれます

父様の大きな手が気持よくて本当にウトウトとしてきました

「あなた、前にお話しした魔術の先生の事ですが」

「ああ、しかしユリアナにはまだ早いのではないか？まだこの子は3歳だ」

「でも、この子の魔力は特殊です。このままでは体がもちません。大変かもしれませんが早く魔力のコントロールを出来るようにならなくては」

なんですとっー！

思わず起き上がりそうになる体を必死で抑え、両親の会話を聞いていきます

眠気なんてぶっ飛びましたよ

どうやら私の魔力は母様から受け継がれたようなのですが、母様曰く何かが違うようだとの事です。

母様にも分からないので専門の魔術の先生について勉強をしたほうがよいと

母様のように癒しの魔力を持つ者は稀な上、魔力に飲み込まれ精神に異常をきたす（怖っ）のだそうだ

3歳で早くも勉強なんてと父様は躊躇しているようですが母様の強い主張によって王都から家庭教師として魔術師がやってくる事がきまったようだ。

なににせよ早くも勉強の毎日になりそうです。知識は必要ですから早いのはいいことです

廃人は嫌なので魔術のコントロールは特に頑張りたいと思います  
前世では魔術なんて使えなかったから少し楽しみですね



## 先生がやってきました

魔術師の先生が王都からやってきました  
カイゼル「アラート先生です」

青白く光る瞳、つりあがり気味の目尻が少し冷たい印象を与える知的イケメン眼鏡男子様です

首元で一つに括られた金色の髪にはところどころに白い物体が・・・  
・20歳と聞いていたけど若白髪っ！まさかの若白髪なのかあ！！  
・・・と思つたらどうやら生まれつきだそうです。

ご本人より説明を受けてしまいました  
不寐にガン見してしまつてごめんなさい

「伯爵夫人たつての願いによりまいりましたが、私が見る限りご令嬢には魔力を感じられませんね」

自己紹介もそこにアラート先生は私を一瞥するとはつきり断言してくださいました

えっ？じゃあ今までの高熱は？

そもそも魔力つて感知できるものなの？あつ魔力を持っている者同士ならわかるのかな

母様は魔力を持っているから私の中にある魔力を感じて先生を呼んだんじゃ・・・

それとも先生の特異能力か？

う〜ん気になる事は聞いてみるのが一番です

「せんせい、まりよくをもっているのかどうかはみただけでわかるのですか？」

「魔力を持つ者同士は視る事ができます。力の強いものは体にオー



ラが現れ。例え少量でも瞳を見れば分かります。魔力を持つ者は少々特殊な瞳をしておりますので。」

なるほど、じゃあ先刻から先生の周りに渦巻いていた青白いオーラは嫌々ここへ来させられた事による不機嫌オーラではなく本物の魔力のオーラってことでしょうか？

・・・あれっ？じゃあ私にはやっぱり魔力があるって事？

瞳が特殊と言っていましたたが青い瞳の奥が時折白く光ることでしょうか

やっぱり分からない事は聞きましょう。

相手はたとえやる気がなくても今のところは私の先生なのですから

「……………私の瞳がなんですって？」

「はい、ですからせんせいのひとみにしろいきれいなチカチカがみえます。ははさまのひとみはきんいろにひかっています。」

「それが視えると？」

「はい、せんせいは、からだからもあおとしろのひかりがみえます。ははさまにはみえなかつたのでせんせいのがまりよくがつよいということですか？」

先生は私の質問に答える事はなく、ものすごい勢いで両手で人の頬を挟み覗き込んできました

ちかつ！近いです！せんせつ……………！

鼻の頭がくつつきそうな距離ってどういうこと……………！  
目の前に綺麗な瞳がウツトリ……………なんて場合じゃない！！

「……………なるほど」

納得したのかようやく放してくださいました

きつと自分、顔が真っ赤な事でしょう。恥ずかしさで憤死しそうです  
まあ、先生にしてみれば子供の顔を覗きこんだだけなのでしょ  
うけ  
ど・・・

「先程の言葉撤回させていただきます。ご令嬢には魔力が認められ  
ます。本来魔力は体をめぐり瞳から放出されていきます。しかし何  
らかの原因で瞳から魔力が放出されることなく体の中に籠もってし  
まい、力が体に高熱となって巡ってしまってるようです」

「自家中毒みたいなことですか」

「そうですね、その例えはいいと思います。自分の魔力に・・・  
え？」

やばっ！声に出してたようです

先生が不審な目で見てきます

「ご令嬢はよくそのような言葉を知っておられましたね。確か御年  
は3歳・・・でしたか？」

「このまえ4さいになりました。ははさまがそのようなことをいっ  
てしんぱいしていましたので」

子供っぽく首をかしげながら笑顔でこたえますが、冷や汗だらだら  
で背筋が冷たいです

こわいっ！この先生はヤバイです！！

昔（前世）の同級生にこんな目をした奴がいた

『己の探究の為なら何でもしてやるぜっ』て奴だったよな  
アイツは絶対マッドサイエンティストになってるハズだ

前世の記憶がある事がばれたら絶対実験体です  
なにされるか分かりません

それだけは絶対避けなくては！！

「まあいいでしょう。これから家庭教師としてお世話になるのですから……時間は存分にあるでしょう」

ニヤリと笑う先生のお顔は怖いですっ

どこぞの魔王様でしょうか……

なにやら私の体の事も先生には面白い症例のようで嬉々として私の家庭教師をやるようです

もう、実験体は決定……なのでしょう……



## 魔術は難しいようです

魔術の練習、一般教養の勉強を始める事になりました。  
何故4歳児に一般教養？と不思議に思いましたがこれは魔術に関係しているようです。

この世界には3つの『力』がある

世界の至る所にいる精霊たちを役する事が出来る精霊使い。

陣を描き己の少量の魔力と生贄を捧げる魔導師

己の魔力のみを糧とする魔術師

魔力を持つ者は少ない

しかもその中でも精霊使いはもっと少ない。精霊に好かれる体質、魔力が関係しているらしいのだけど精霊どんな人物が精霊に好かれるかなどは分かっていない。

魔導師は闇のもの。己の少ない魔力を補うために生贄を使う為、利己的な者が陥りやすい。

もっとも多くいるのは魔術師。才能にはかなりの差があるがもともと魔術師の絶対数が少ないのでほとんどが王都の専門の学校を出た後、王宮で働くようになるらしい

「魔力があれば魔術が使えるものではありません、魔術師は世界の『理』を知り、『源』を視て、『構築』し始めて魔術となるのです」「ことわり、みなもと、こうちく。ですか？」

なにやら難しい話になってきました

アラート先生の話では

世界には『理』つまり法則があり『源』と呼ばれる魔術を使う為の材料がある

その材料を『構築』組み合わせる魔術を発動する・・・らしい  
魔術師になるためには世界の法則にしたがい、魔力を使い術に必要な材料を集め創りだせるようにならなくてはならないということだ  
なるほど、つまり『理』を知るために必要なのが学問であり世間の常識であつたりするわけで。

あとは魔力があれば『源』と『構築』が出来るってことですねっ  
はい、頭に叩き込みました

「それで、『みなもと』とはどうすればみることができのでしょうか？」

魔術の基本がわかったからには気になりますね  
私はまだ『源』とやらは視えていません。

「ほう、たったあれだけの説明でご理解いただけたとはいえ、  
ありうれしい限りです」

アラート先生の目が怪しく光りますがここはもうスルーです！  
聞かなかつた事にして授業を続けましょう！

「『源』を視るにはまず体中に流れる魔力を感じ取り、その魔力を  
瞳に集中させてください。」

アラート先生もこちらの意を汲み取ってくれたのかそれとも何か思  
惑があるのかこれ以上はつつこむ事もせず授業を再開してください  
ました

目を瞑り体に流れる魔力を感じてみます

なんだか暖かいモノが体をぐるぐる回っているような・・・これの

事でしょうか

これを瞳に集中させて、目を開けてみます

「・・・・・・・・元素記号？」

目の前に光るアルファベットがあっちこちに浮いております

CO<sub>2</sub> H<sub>2</sub>O N<sub>2</sub> Ar O<sub>2</sub>

こちらの世界の文字は元いたところと同じアルファベットでローマ字表記だったので言葉を覚えるよりも楽だった事を覚えている

えっ？でもこれってどう見ても元素記号？いや化学式？もあるのか？

空気に含まれる酸素や二酸化炭素の化学式ですよ・・・ね・・・

- Ar ってなんだ？

もしかしてこれが『源』？

「せんせい、もじがみえます」

「ええ、それが『源』です。」

先生が右手のひらを胸の前に差し出し呪文のようなものを呟いていきます

すると空气中を漂っていた英数字が先生の手ひらに集まりだし・・・

ボンッ！！

わっ、爆発しました！すげえ

「『源』の性質を見極め魔力によって引き寄せ『構築』し発動させます。『源』の性質が分からなければ魔力があっても集めることは

出来ませんし、たとえ性質が分かってても魔力が足りなければ『構築』出来ません」

魔力にも性質があり火、水、土、風にそれぞれ馴染みやすい術があり『源』の視える種類も魔力によって違ってくるそうです。一般的にはこの4つの術を使うのが魔術師としての基本だそうです。その中でも母様のような特殊な魔力を持つ者のいるそうです。先生も特殊な魔力を持つそうですがどんなモノかは教えてくれませんでした（け〜ち〜）

やり方もわかった事ですし私も早速やってみようと思います。とりあえず水を手のひらに集めてみましょう。元素は確かそこにあるH<sub>2</sub>Oですよね。

――あれ？集まってくれません

漂う英数字に手を伸ばしてみました。が触る事も出来ません。先生はさわったりできてるのに・・・なんで？

「せんせい『みなもと』にさわれません」

「ああ、ご令嬢にはまだ無理ですね。体内の魔力を外に放出する事が出来ませんから術は出来なんでしょう。でもまあ視ることはできるようになりましたから、視る事によって魔力を消費出来ますから高熱に悩まされる事は無くなるでしょう」

なんですとー！！

せっかく魔術が使えるようになってとちよっぴり楽しみだったのに・

原因が分かるまでは『理』の勉強をがんばりましょうと笑顔で先生



に言われては頑張るしかありません

「どこまで令嬢の頭に詰め込めるか楽しみですね」  
とにやり笑いと共に研究者の顔ヘッドサイエンティストになっていたのは見なかった事になります

魔術は難しいようです（後書き）

息子がなかなかできません（TT）  
あらすじにいつわりありますね・・・

閑話1 (前書き)

リステリア視点です

## 閑話 1

- - - - 愛しいユリアナ

神様が授けくれた私たちの天使

旦那様によく似た髪質の柔らかな髪を撫でてやると、とても気持ちよさそうに眠りにつく

まだ幼いこの子に早くもこうして魔術の勉強をさせなければならぬいなんで

この子の魔力は私のものとよく似ている

多分、私と同じ『癒し』の属性を持っているのだと思う

それでもこの子の魔力は表へ出る事がない

アラート先生ですらこの子の瞳の奥まで視て初めて分かったと仰っていたわ

外へ出ない魔力は幼い体を蝕む

・・・でも、魔力のせいだけではなかったのだと思う

ユリアナはよく悪夢にうなされていた

はじめは幼い子供の夜泣きなのかと思った

でも、あの子はいつも謝っていた

涙を流し、いつも「だれか」に謝り続ける

時折、耳慣れない言葉を発する事もあったけど

「だれか」を求めて両手を空に彷徨わせる

そして朝になれば何も覚えていないよういつもの笑顔で挨拶をし

てくれる

熱のせいであまり外へ出かける事も出来ずにベットの上でおとなしく絵本を読んでいた

あの子がいつも大事そうに読む絵本

隣国の国王の英雄譚

50年前に起きた史実をもとに書かれていると聞いたわ  
絵本の中の主達をいつも愛しそうに見つめて . . . . .

. . . . . 転生者

時折、生前の記憶を持つという子供が生まれるという

『癒し』の魔力を持つ者に語り継がれる事

それほど多くは無い…けれど . . . . . いる

ユリアナも転生者なのでしょう

それもユーターリアスの英雄王に関係している

いつか、あの子がその事を話してくれるまでは母親でいられるのか  
しら . . . . .

いつか、あの子が話してくれた後も母親でいられるかしら . . . . .

閑話2（前書き）

カイゼル視点です

## 閑話 2

とある伯爵令嬢の家庭教師をやることとなった  
王都から馬車で片道 8 時間というかなり辺鄙なところに住む伯爵家  
のご令嬢だそうだ

幼いころから魔力がありその為に高熱で寝込んでいたので魔力の扱  
いを教えて欲しいとの事だ  
はんっ・・・ばかばかしい

貴族の奴らは自分の子供に魔力があるといつては魔術師マジックを引つ掻き  
まわしてくる

自分たちの家から魔術師が出るのは貴族にとって栄誉な事だろう  
ありもしない魔力をあると言つてはこちらを呼びつけ魔力は無いと  
告げれば何とかしると言つてくる

だいたい魔力が現れだすのは 5 歳を過ぎてからだ  
3 歳やそこらの子供に魔力なんてあり得ん  
まったく面倒なかぎりだな

ただ伯爵夫人は確か『癒し』の特殊魔力を持っていたはずだ  
もしかすると魔力持ちという事もあり得るのか？

しかしフィールゼン家は長男が 7 歳の時に行った魔力判定で魔力持  
ちと認定され王都の学院に入学させられたはず

同じ血筋から魔力持ちが 2 人？そんなことがあるのか？

まあ、行ってみれば分かる事が

『癒し』の特殊魔力を持つ夫人に会ってみるのは少し楽しみだ

\*\*\*\*\*

会ってみた令嬢はやはり魔力を感じる事はなかった

瞳の奥に輝きは無いって普通の子供だ

その事を本人に告げてみれば令嬢は眉を寄せ何か考えているようだった

「……せんせいひとみにしろいきれいなチカチカがみえます」

令嬢の言葉に愕然とした

魔力の波動が視えるのか？

そんなバカな

確かに令嬢には魔力の波動を感じない

私の持つ特殊魔力『探索<sup>サーチ</sup>』はなんの反応も示していない

『探索』はあらゆるものの性質を見る、どんな少量の魔力であろうと見つけ出しその性質が視える特殊魔力

それをも誤魔化す何かが令嬢の体にある？

いや、そんなはずは……

令嬢の瞳をもう一度よく見なおしてみると青碧眼の奥に金色に輝く光が渦巻いていた

魔力の輝き、伯爵夫人と同じ『癒し』だろう

しかし魔力は体を廻り体外に出る事が出来ないようだ

令嬢にその事を伝えてみれば本人は体の異変についての私の説明に納得したようだった

あまりに落ち着いた態度が腑に落ちない

確かまだ3歳のはずだ、体の仕組みに対し知識がある？

その事の尋ねてみれば母親から聞いたのだという

しかし先程の理知的な瞳は3歳やそこらの子供の顔ではなかった



私の『探索』を持ってしても見つけ出す事の困難な魔力  
年齢に不似合いな態度と言動

本人は一生懸命誤魔化しているようだが・・・

まあ7歳に行く魔力判定までまだ3年もある

じっくりと調べていけばいい・・・令嬢の体の謎も、本人が必死  
になって隠している事も・・・な

王宮でバカな貴族どもを相手にするより有意義な日々を過ごせそうだ

## 魔術はつかえるようになるのでしょうか

ユリアナ5歳になりました  
ようやく5歳・・・長い1年でした・・・そしてとても濃い1年  
でした

よもやこの年にしてあんなに勉強・・・  
ええ、大学受験の時よりも詰め込まれましたよ  
一般教養（言語、数学、地理、医学などなど）  
加えて貴族令嬢の基本、礼儀作法、ダンス、等々

政治や経済まで教えられた時には絶対、先生は私がどこまで理解できるか調べてたに違いない

最近知った事だが先生の特殊魔力は「探索<sup>サーチ</sup>」というのだそうだ  
要は世界のありとあらゆるものの本質を探し出して調べつくすぜっ  
・・・というものようだ  
やっぱりマッドサイ・・・いや魔術だからちよつと違うか・・・  
私の事も薄々気づいているのかも知れないです

母様は先生にしごかれていた姿を生温かい目で見守ってくれます  
助けては下さいません・・・何故？

「ユリアナ頑張ってるね」  
と聖母の頬笑みで応援されては頑張るしかないようです

自分で言うのもなんですがかなり優秀な生徒だったと思いますよ  
言語に関しては門脇<sup>かどわき</sup> 由利<sup>ゆり</sup>（前世）の時にかなり苦労して覚えたの  
で問題なし

数学は前の世界とほぼ同じだったのでこちらも問題なし

政治や経済は聞き覚えのない言葉が多くあったのですがさすが子供の脳は違いわ

記憶の収納スペースが多いのか意外と楽に頭の中に入ってくるようです

問題だったのは医学

難しくって苦労したんじゃない・・・その逆でした

あまりにも医学が発展してない！！

この世界では人体に刃物を入れるのはタブーとされているから病気になるっても薬草による治療か母様のような『癒し』魔力を持つ魔術師に治療を頼むしかないのだが『癒し』の魔術師は本当に少ないから貴族ぐらいしか恩恵にあずかれない

由利の時も思った事だった・・・

医者と呼ばれるものは数が少なく、逃亡中に何度か患者を治療した事がある

医療器具も薬剤も何も無い処では私のできる事なんてたかが知れてた薬草の効能だって、もといた世界と同じかどうかも分からない

助けられなかった命が沢山ある・・・

あちら世界では当たり前前のように助かる命がこちらでは失われていく・・・

それでも医者に見取られた事を家族は感謝していた

それが悔しかった

感謝される事なんて何も出来なかった。ただ「医者」という名だけで患者を見取っただけで己の力の無さを実感した

由利には出来なかった事

ユリアナになら出来るのだろうか？

ユリアナには母様と同じ『癒し』の魔力があるらしい

未だ現れない私の魔力・・・

「令嬢は魔術を忌避されているようですね。」  
先生の言葉にびっくりした

そんなはずなのに、早く魔術を使えるようになりたいと思ってるのに

「では、無意識なのでしょう。令嬢の心が魔術を使う事を嫌がり魔力を内へ内へと押し留めようとしているように見受けられます」

魔術を忌避

やっぱり前世との関係ですよ

無理やりこちらに呼び出され、閉じ込められ、殺された・・・

すべて魔導師による魔術

あちらの世界は魔術なんて存在しなかったから余計に未知なる力に恐れを抱いた

それがトラウマとなって己の魔力を封じていると

じゃあ、この気持ちを克服しないと魔術はつかえないってこと？

そんなぁ・・・心理学は苦手なのに

・・・じゃなくて克服ってこの場合、どうすればいいんでしょうか？



## 見学する事は大事ですね

今日は久々に勉強はお休みです

母様が月に一度行つた治療奉仕に付き合うことになりました

私が生まれる前は領地や近隣の村の住人を対象に『癒し』の力をつかい無償で治療を行っていたそう

しかし生まれた娘が高熱で寝込むようになり、娘の看病に集中するため奉仕は暫く休んでいたそうなのだ。けれどアラート先生がやってきてからは寝込む事も無くなった為、1年前から月に一度伯爵家の近くに建てられた診療所で奉仕を再開しているのだ

伯爵家領地には診療所がある

これは母様が伯爵家に嫁ぐにあたって建てたものだそう

今は医者2人がいて診療にあたり、重病人の場合は母様に連絡が行くようになって

伯爵家管理なので領民は基本的に無料、近隣の住人にも基本薬剤代くらいしか貰わないのでいつも診療所は患者でいっぱいなのだ  
アラート先生に言わせれば医療行為が無料なのは珍しい事なのだ  
うだ

確かに先生の授業の中でも医者の数は少なくほとんどは王都近隣に集中していて、しかも高額の治療費がかかるとか

「令嬢には夫人と同じ魔力がある筈ですので夫人の『癒し』の魔術を見るのはいい勉強になると思いますよ。己が対象なのと客観的に視るのはまた違いますからね」

「はい、先生。しっかりと勉強します。・・・ところで先生、この薬草の成分教えてください」

真面目ぶつた生徒顔で答えた後、キラキラお目々でおねだりです

もう5歳の令嬢ぶりっこはしませんが教えを請う時は別ですネ  
先生のツッコミもかるくスルーしております

アラート先生は「またか」とため息交じりに面倒臭そうな顔をしながらも机の上の置かれた薬草を手に取り一つづつ成分を教えてくださいます。こちらはスケッチした絵の横に成分を書き込んでいくのです  
先生の特異魔力を聞いたときこれはもう利用しない手はないっ・・・  
と思いましたがよ

この力があれば薬草をもっと有効利用できるし、新しい薬効の草花も見つけられる

いま領地にいる医者、タジル先生もちやんと王都で医学の勉強した、  
良い先生なのだけこれこちらの医療技術は少々心許ない

ただでさえ薬だけが頼りのような医療行為なのに薬剤の種類も、知識もやっぱり足りないから患者さんの治療が長引いたり、悪化してしまったりする

だから薬草辞典のようなものを作ろうと思った

色々な効能の薬草がわかれば、組み合わせによって患者にあった薬を処方したりできる

その為には医者が薬草について知らなければならぬ

アラート先生の力はまさに渡りに船なのです・・・あれ？使い方が違うか？

せつかく数年はこちらに家庭教師として滞在されるのだからしっかりと利用・・・いや協力願わねば

タジル先生も齢60歳の貫録なのから5歳の令嬢の戯言と笑うことなく協力してくださっています

おかげでかなりの薬草を採取出来て処方の幅も広がっているようです

母様の治療行為は基本的に重病人のみなのです。

医者の治療行為でも治らない病や怪我の患者を『癒し』ていきます  
その為人数もそれほど多くはありません

母様達のような特殊魔力は普通の魔術と違って己の魔力のみを使用  
し術を行使するのだそうです

ゆえに魔力の消費が激しい、魔術師にとって魔力は魂の源であり魔  
力の枯渇は魂の死を意味する

その為に母様は月に1度病状によるがせいぜい4、5人の患者しか  
診る事が出来ない

『癒し』の魔術師の殆どがそうらしい

今日の患者は下半身不随の8歳の男の子、高熱が続き薬剤が聞か  
なかった女性、毒虫に両目をやられ視力を失った男性などさまざまだ  
母様は一人一人の症状を視て魔術を使う

特殊魔力を持つ者はそれぞれ魔術の行使の仕方が違うのだそうだ  
母様の場合は歌を歌うことよって『癒し』が行われる

魔力をつかって視れば母様の歌は光の粒になって患部を優しく包み  
込んでいます

「母様の歌に魔力が宿って、患者さんの細胞を修復してゆくのです  
ね」

「令嬢には視えますか？」

「え？金色の光の粒が視えますけど、先生には視えないんですか？」

「ええ、視る事は出来ません。多分同じ属性の魔力の持ち主だけが  
視る事が出来るのでしょうかね」

そんな会話を先生としているうちに患者さんはみるみる回復してい



きます

下半身不随や失明なんて現代医学でも治療困難なものを母様の魔術は治す事が出来るようです

「『癒し』の魔力つてこんな病まで治せてしまうんですね」

自分達が今まで努力しても治せない病が『癒し』によって治ってゆく、その力の凄さに敬意と恐れが混じり体の震えが止まらない。思わず咳いてしまった私に苦笑しながらも先生は優しく頭を撫でてくれた

「そうですね、必要以上に恐れる必要はありませんが魔術も万能ではありません、すべての病が治せるわけではないと思いますよ。しかし傍目には奇跡が起きたように見えます。だから貴族どもは『癒し』の魔術師を己の手の中に入れようと躍起になるのですよ。『癒し』の魔術師がこうして一般人の治療を行うなんて此処ぐらいではないですね」

貴族嫌いな先生はいつも皮肉めいた笑みを浮かべる事が多いけど、

今日はとても優しいお顔で微笑んでいました

母様のように魔力を使えるようになりたいとは思いますがやはり心の奥底は魔力を恐れているのかもしれないね……



## 視えるのも困りものです

母様の治療奉仕から1週間が経ちました  
今回治療にあたった患者さんの経過観察をタジル先生が行っていましたが完治したようです

私は今診療所にて薬草辞典に勤しんでおります  
勉強の方はと言えば・・・

「令嬢はもう魔術学院の初等部で習うべきすべてを取得いたしましたのでもう特に勉強に問題は無いかと。ご希望とあれば中等部の基  
本学を進めますが」

「ちよつくとまつて!!先生っ?!まつて!いまなんて?」

この1年やたら勉強勉強で貴族は大変だなあ、なんて思っ  
て頑張りましたが初等部の学問終了って・・・

確か魔術学院は7歳以上の魔力保有者を対象に初等部、中等部、高等部、と3年づつ、成績優秀者だけがその上の「院」に行くつて聞  
きましたけど」

「おや、きちんと覚えておいでで、教えた者としてはうれしい限り  
ですね」

「先生、私まだ5歳なんですけど・・・」

この1年を返してください・・・  
魔力の事もあったから死ぬ気で頑張りました。ひそかに徹夜だつて  
したんですよ

身長伸びなかつたらどうしてくれるんですか・・・成長期の睡眠は  
大事なんですよ・・・

「それはそれは・・・令嬢があまりにも教え甲斐があつたもので  
すから、私も少々調子に乗って進めすぎてしまいましたね。申し訳あ  
りません」

言葉では謝罪をしているけど先生の目は笑ってます  
コイツ絶対悪いと思ってないな。

「まあ、基本的な知識もありますし、『源』も視る事が出来るよう  
になりました。あとはじっくりと魔術というものを理解して使える  
ようになるだけですよ」

「・・・それが一番難しいんですね」

「まだ、魔力判定まで2年もあります。焦らなくても大丈夫ですよ」

先生はそう言ってくれたけど魔力判定で魔力持ちと分かれば即魔術  
学院に入学させられるらしい

なにせ魔術師は国にとって貴重な存在だ

魔力があるなら魔術の基本学さえ習えば普通は魔術を使う事が出来  
るものらしい

それが出来ないんじゃないやあ、いじめられる・・・絶対いじめにあうで  
す（偏見）

それだけは避けたいですよ

とはいえ意気込んだところで急に魔術が使える事は無いので、「や  
れることからやろう」という事で薬草辞典の製作に尽力しております  
勿論、先生もこき使っ・・・ご協力頂いております

そんな平和な日常なのですか・・・

この2、3日とても気になる事があるんです・・・

あたま・・・そう頭なんです・・・アンデリックさんのあたまがあ

・  
・

アンデリックさんというのはもともと伯爵家で働く庭師さんなのです。最近診療所でも薬草園を造り、使用する薬草を育てるようになりました。

今までは森の中に入って必要な薬草を採りに行くというのが一般的だった様なのですが危険な所に生息していたり、時期によって採れなかったりしたので、栽培可能な品種は育ててみようという事になりました。

そこでアンデリックさんに我が家の庭の手入れの傍ら診療所の薬草園の管理をお願いしたので

草木を愛し女性子供に優しい笑顔が爽やかな純朴好青年、25歳独身！

麦わら帽子姿がとってもステキ！……………取りさえしなれば

礼儀正しい彼は例え仕事中心であつても雇い主である伯爵家の人間が通れば帽子を脱ぎ丁寧に挨拶してくれる

伯爵令嬢である私にも……………である

ただ、彼の頭は残念なのです

例えるならヨーロッパの僧侶のように頭のとっぺんだけが寂しいのです

僧侶の場合は自分から進んで剃髪しその髪型なのでしょうが、彼の場合は不可抗力

まあ、そういう人もいるよね……………優しいいい人だからいいじゃない。今まではそう思っていた彼の頭なんです……………最近変なのです

彼の頭から金色いものが……………いや髪の毛ではない……………ハズ

うすばんやりと金色の線のようなものが何十本もうねっているのです。意志を持つように、目なんかは気づいてるのにこちらに気づいてまるで助けを求めるようにこちらに向かってうねってきます

イヤッ！！気持ちわるっ！！一体なんなんだあ！あれは！！

今もアンデリックさんは診療所の窓の外、診療所の薬草園でお仕事  
中です

あつ、目が合っつていつものお辞儀をされました

ああ・・・やっぱりまた見えます

「先生！アンデリックさんの頭なんですけど・・・見えます？」

隣で薬草とにらめっこしていた先生を窓際まで引つ張りアンデリッ  
クさんを見てもらいます

「ああ、彼の頭ですね・・・本人も気にしているかもしれないの  
であまり凝視されては」

「いいえ、そうじゃなくつて・・・金色もの見えませんか？なにか  
うねってませんか？」

「は？いいえ。とくには・・・」

ああつ・・・やっぱり先生にはツ見えないんだあ

なに？アレ！！ミミズ？寄生虫？！

お化け？・・・よーかい？

「先生、私、へんなんです！」

「令嬢が変なのは存じてますが」

あつ、このヤロウまた本音が漏れてる

「そうではなくつて！変なものが見えるんです！アンデリックさん  
の頭に金色の線がうねうねと〜！うー気持ち悪いー」

「・・・よくは分かりませんが、『癒し』の魔力の影響では？特殊

魔力は個人によって魔術の行使の仕方から見え方までかなり違いますから」

残念な人でも見るような視線はやめてください先生

・・・じゃあ、アレは私の『癒し』の魔力によるものなのか？

でもそうになるとアンデリックさんのアレって・・・病気・・・って言うのか？

いや、でも治療で良くなる事もあるから・・・でも、そんなものまで対象なんでしょうか『癒し』の魔力って・・・

今度、母様に聞いてみなくては・・・です

## さつくりカミングアウトされました

夕食後、母様に早速『癒し』の事を尋ねてみる事にします

ちよつど父様は先生と何やら話し合っているようですので今がチャンスです

さすがに父様にまでアンデリックさんの事を話すのは宜しくないですよね

場所も場所な事ですし、患者(?)の守秘義務がありますよね

父様たちが話し合っているテーブルから少し離れた窓際で母様はソファに座り刺繍をしていました

「母様、聞きたい事があるんですけど」

「あら、ユリアナ。なにかしら？」

母様は手を止め、刺繍道具をしまつと私の話を聞く態勢をつくってくれます

母様は決して子供の話を片手間で聞かない、母親の鏡ですね

「母様、最近、庭師のアンデリックさんの頭なんですけど・・・」  
離れてるとはいえ、同じ室内に居るので父様に聞こえてしまつといけないので少し声をひそめて話し始めます

「金色の線のようなモノがうねっているのが見えるんです。先生は『癒し』の魔力のせいだつていうんです。母様には見えますか？」

「アンデリックさん？今日もご挨拶していただいたけど・・・何も見えなかつたと思うわ」

ああ母様には視えていないようです

母様の場合は患部（母様曰く、体の悪い処は青くくすんだ色に見えるのだそうだ。）

そこに向つて”治れ治れ”と念じながら歌に魔力を乗せると患部へ魔力が沁み込んでいつて『癒し』となるのだそうだ



……え？医学知識なしですか……母様

「ええ、私には診療所の先生のような医学知識は全くないの。だからタジル先生のような優秀な先生に基本的な治療を行っていただけで、先生が『癒し』が必要という患者さんを私が治していくのよ」

どうやら診療の主導権はタジル先生にあったようです

母様は『癒し』の力の効く範囲なら重病人だろうが軽傷だろうが同じ魔力量で治してしまうらしい

だからタジル先生が患者の選別をし母様の体に負担の無い範囲内で多くの患者を助けられるようにしているようです

タジル先生……すごい人だったんですね

勿論、母様でも治せない病気や怪我の人もいる

その人々の患部はどす黒くなっていてももう母様の魔力は届かないんだそうだ

その事を話す母様の顔は少し悲しげだった

じゃあ、アンデリックさんのアレは母様の中では病気じゃない認識なのですね

でも、私には視える……違いは何？

やっぱり医学知識の有無……なのかな

アンデリックさんの年齢からすると確かにあの頭髪の寂しさは脱毛症の可能性もあるけど……

昔の知識をフル回転です

魔力が使えないんじゃないってまでたっても挨拶のたびにアレを視なくてならない

それはヤダ。気持ち悪すぎる

薬草で何とかならないでしょうか？

血行促進や代謝の促進が必要なはずだからセンブリやニンジンのエキスあたりか・・・

「まあ、ユリアナは薬草に詳しいのね。タジル先生が医学知識もすごいつて仰つてたけど前世はお医者様だったの？」

考え事をいつの間にか呟いていたようです

・・・ちよつとまって、いま母様変な事言いませんでしたか？

「あら？ちがうの？でもお医者様って事はもしかして私よりも年上だったのかしら・・・ふふふ、どうしましょう」

「母様・・・あの・・・知ってる・・・の？」

言葉になりません。混乱すぎて何を聞いていいのか、  
- - -  
- 母様が何を知っているのか

「ユリアナの母親ですもの。貴女に前世の記憶が残っていて・・・多分、50年前に起きたユーテリアス国の関係者じゃないかしら・・・という事くらいかしら」

うろたえた私の顔を見て母様が抱き上げ膝の上に座らせ抱きしめてくれます

・・・ちよつぱり照れくさいですね

「『癒し』の魔術師の間では時折ある話だつて伝えられてるわ。幼い子供が自分の生まれる前の話をするつて、でもそれは時が経つにつれ記憶は薄れ、普通の子と変わらなくなる。」

「・・・私の記憶は薄れてきてない」

それどころか未だ鮮明に覚えている  
忘れる事なんて出来ない

「きつとそれは今のユリアナにも大切な事だからなのよ。必要な記憶なんかじゃない。とても大切なもの。ユリアナは隠しておきたいのかも知れないけど、今の生活の為に大切な記憶を押さえ込まないでほしいの」

「母様・・・」

母様はアラート先生から私が魔術を使うことを恐れている事を聞いて前世の事を父様や母様が知っている事を話そうと思っただけ普通で暮らすのなら前世の記憶なんて有っても無くてもどちらでもいい。自分たちの可愛い娘には変わりはないのだから。でも記憶が辛いものなら話すことで心は少しでも軽くなるのではないか、悲しみや恐れは消えなくても記憶を共有する事で薄くする事も私たちにだって出来るはずだから・・・と

「私の自己満足なのかもしれないけどね」

そう微笑みながら母様は再び私を抱きしめてくれます

私は俯いたまま顔をあげる事が出来ませんでした

ひどく混乱して、心の中に恥ずかしさとやましさと嬉しさが入り混じっていた

「ユリアナ、お前が誰であろうと私たちの娘には変わりはないよ」

いつの間にか傍までやってきた父様に頭を撫でられ咄嗟に顔をあげてしまいました

父様はいつもの変わらない笑顔で私に微笑んでくれます

両親に促されるように私はポツリポツリと前世の話を始めました

前世で小児科医をしていた事

理不尽な召喚にあった事

助けてくれた騎士、サイラス・トルクスの事

今は英雄王となった子供たちの事

そして自分の最期の事

母様はサイラスと由利の結婚の話になると「きゃあ、駆落ち婚ね！ステキ」とはしゃいでおりました

そして何故か両親と共に興味心身に聞いているアラート先生、目が輝きすぎです

ひとつづつあの時の起きた事を話す事によって自分の中でも何かが変わっていくようだった

ユリアナという子供にとっては由利の記憶は強烈すぎるものなのだと思います

幼い体は膨大な記憶と感情に拒否反応を起こし、記憶は幼い体に戸惑いがあった

いまこうして由利の人生を振り返る事によってようやく心と体に折り合いがつき始めているようだ

私はいつの間にか涙を流しながら母様に抱きしめられていた

泣く事は好きじゃない、おのれの無力さに嘆いたとしても何も変わらない

涙を流すよりも自分の出来る事を迅速に行動する方がよっぽど建設的だ

.....ずっとそう思っていたはずなのに

「大丈夫よ」そう言われ、抱きしめられる事の安心感  
庇護を受けながらただ感情に任せて涙する事が出来る事が素直にう  
れしかった

## 魔獣があらわれたそうです

一晩明けて気持ちの良い朝がやってきました

雲ひとつない快晴です。小鳥もいつも通り元気に鳴いております

……只今、絶賛自己嫌悪中であります

昨晚の痴態を思い出すと、もう恥ずかしさでベットの所で身悶えする事しか出来ません

「おはようユリアナ、もう起きてるかしら」

ノックと共に母様が部屋に入ってきてきます

「ふふっ、恥ずかしがってるユリアナもかわいいけどそろそろ朝食にしましょう」

「~~~~~」

母様には私の行動はバレバレのようです

悪あがきは諦め着替えて朝食に行く事にしましょう

\*\*\*\*\*

「そういえば昨夜は色々あって話しそびれたんだが、隣の領地に魔獣が現れたそうだよ」

朝食の最中に父様、さくつと爆弾発言です

「隣の家で子豚が6匹生まれたよ」的な軽いノリで話さないでください

スープ零しちゃったじゃないですか

魔獣と言えば普通の武器では歯が立たない生き物なのですよ  
鍛えられた鋼を魔術で強化させ初めて魔獣に傷をつける事が出来る  
のです

救いなのは魔獣はそれほど数が多いわけではなく、群れをなす事も  
人里に現れる事自体も少ないこと

アラート先生の授業で新たに知った事です  
が魔獣は生まれながら魔獣  
なのでなく獣等の死骸に『魔』が宿り魔獣となるのだそうだ  
だから魔獣の種類も色々、小さなネズミから牛等の大型動物も魔獣  
となりうるのだ

ただの獣との違いは赤い瞳と体毛が黒い鋼のように硬くなること、  
そして強い魔力を有す事

もとが骸のせいや多少の傷では死ぬ事がない、滅するには首を切断  
しなくてはならない

凶暴ではあるが無闇に人を襲う事はしないが本能は獣と同じなのだ。  
身に危険を感じれば人を襲う

それに魔獣は魔術師の魔力を欲するそう  
で潜在魔力のある子供などが襲われやすいのだ

『魔』に関してはいまだ分からない事が多い  
視た事があるものは黒い霧のようなものだ  
という、魔力のあるものにしか視えず  
魔導師の描く陣によって生み出される。

『魔』自体が強い魔力の塊ではあるが  
生きた獣に『魔』が宿る事は無い

昔、生きた人間に『魔』を宿させようと  
試みた魔導師がいたらしいが実験体となつた者は『魔』にのまれ、  
精神を破壊され、もはや心身ともに  
人と呼べないモノとなつてしまつた  
そうだった

「20年前に開かずの森から漏れ出た『魔』  
によって生み出された

生き残りのようだよ」

「父様、20年前何かあったのですか？」

「ああ、詳しい事はよくわからないがユーテリアス国にある開かずの森の封印が弛んだようなんだよ。それに乗じてかなりの量の『魔』が漏れ出たらしいんだ。でも殆どの『魔』も魔獣もユーテリアス国の騎士たちが捕縛したって聞いていたんだが」

「開かずの森つてもしかして・・・」

「ええ、令嬢の前世に所縁のある場所です。消えなかった陣を何重もの森の封印によつて人も獣も入れないようになっているので、開いてはいけない、開く事が出来ない『開かずの森』と呼ばれています」

私の呟きに朝食を共にしていたアラート先生が説明してくれます

「それで今日、アラート先生と共にクディル男爵の処に行ってくるよ。いやあ、こんな時に魔術師が近くにいてくれて助かったよ。魔獣の捕縛に魔術師は不可欠だからね」

父様は笑顔でそんなこと言ってますがアラート先生はいかにも面倒臭そうなお顔ですネ

業務外の仕事だと思いつきりため息ついてますが、父様は気にしていないようです

我が家では使えるものなら例え何者であろうと使え精神ですから、こき使われるのは諦めてください先生

隣の領地、クディル男爵家の領地なのだがご領主は確か王都に住んでいて隠居された老男爵が領地を切り盛りしていると聞いている



「クデイル男爵はご高齢だからね、魔獣の対応は体力的にお辛いだから手助けできる事があるだろう。王都のご子息の元にも連絡はあったと思うが時間がかかるだろうから」

父様と先生は領民の若者たちで組織した自警団に、伯爵領にもし魔獣が現れる事があつた場合の対処方法や連絡方法を伝えクデイル男爵家へ行ってしまわれました

たった2人で騎乗し出かけるそうですが、片道20分程の距離とはいえ途中で魔獣に出くわしてしまわないか少し心配です

## 魔獣対策は怠りなく

父様達が出かけられてから母様は自警団の人達と対魔獣用の武器を製作中です

自警団といつても元々は農民なので武器には縁のない人々ばかりです昔は国の周りの情勢も安定してなかったから国民も二男、三男が徴兵されていたが今は平和的な国交が開かれ国の兵士は徴兵制から志願制になったそうだ

王都や国境付近に兵士が配備されるのみで各領地はそれぞれの方法で領地内の統治を行うことになっている

伯爵領では各村から志願してきた若者に自警団を組織させ、各村の警邏ウチや緊急時の招集、行動を自警団の判断で行える権限が与えられている

といつても辺境にある田舎の領地なので極悪犯罪者が来る事は無く殆どが警邏の途中、足の悪いおばあちゃんの代わりにお買い物ものや壊れた窓の修理をしている彼らをよく見かける

森が近くあるので家畜を狙ったオオカミや時折お腹をすかせたクマが現れる事があるらしいが退治するのも彼らの仕事である

のんびり気質の村々のせいかな若者たちも気の良い者が多い・・・うん、いいことだね

武器を使う事もそういった獣相手が多いので自警団の常備武器は剣ではなく弓矢と身長と同じくらいの長さの棒を携帯している

獣の動作は素早いから、なれない刃物を振り回すよりは安全な位置から狙える弓や長めの棒で威嚇した方が森へ追い返せる確率が高い。棒術に関しては父様が自警団の若者たちを訓練しているからかなり腕の立つ者もいるくらいだ

今回も鋼で鍛えた矢じりに母様が魔術で強化を行っていく

母様は周りに集められた『源』をひとつづつ丁寧に組み合わせ強化の魔術を作り上げる

母様の手元に造られた文字や数字のソレはまるでレース編みのように規則正しく編み込まれ矢じりの中へ溶け込んでゆくのが見える私も母様の協力をしたかったけど・・・やはりさわる事も出来ませんでした・・・くすん

子供の私では他に出来る事も無いので母様の横で大人しくしている事しか出来ません

でも、ちよつと気になる事があるんですよね

「母様、魔獣は魔術師を襲うって聞きました。それなら母様やアラート先生がいるこちらに現れるんじゃないんでしょうか？それともクデイル男爵領にも魔術師がいらつしやるんですか？」

「ええ、正確には魔術師ではなく魔術師候補の子なの。レニー君って言うって今年6歳なのだけど魔力が放出してしまっているの」

母様の話ではレニー君は数ヶ月前から突然大量の魔力が現れだしたのだそうだ

魔力の発現は6歳ころから少量ずつ現れるのが普通なのだそうだが7歳の時点でも魔術を行使できるほどの魔力はまだ現れず体内に魔力があると判定機によってわかる程度

私の場合もかなり特殊だったらしいが母様の判断のおかげで体に対する負担は少なかったそうだ

母様に感謝です

でもレニー君の周りには魔術師の血統は無く、いきなり現れた魔力にレニー君自身もどうすればいいかわからなかったようだ、制御できない魔力は次々と『源』を集めだし滅茶苦茶な『構築』そして暴発してしまつたらしい

家の屋根が吹っ飛んでしまつたそうだからかなりの力があるのだろう

そんな未知なる力に両親は息子を恐れた

こんな片田舎の村に住んでいては魔術師に出会う事なんてまずない隣領地の母様も魔術師ではあるが『癒し』の魔術の為かあまり魔術師として見られていない部分がある

それに潜在魔力を持つ子供は7歳に国民全員に行われる魔力判定により王都に集められるから例え暴発を起こす子がいてもそれは学院内での事となる

嵐をおこし屋根を吹っ飛ばす子供を魔術師を知らない両親が恐れるのも仕方ない事なのかもしれない

両親は息子が呪われていると老男爵に訴えてきたそうだ

老男爵はレニー君に魔力があり暴発している事を説明したが両親は信じない。老男爵自身も魔力がある訳ではないので確信を持って説明できないのが要因だったという

そこで老男爵は父様に相談に来たそうだ

母様が魔術師である事とアラート先生が私の家庭教師として伯爵領に居る事を知ったからだそうだ

父様方で相談した結果、アラート先生と父様がレニー君に会いに行く事になった

アラート先生は両親の前でレニー君が暴発したものと同じ魔術を使っ  
て見せ、レニー君が魔力保持者であり7歳になったら王都の魔術学院に入学しなくてはならない旨をつたえたそうだ

しかし入学までにはまだ間があり、このままではまた暴発しかねないというのでレニー君は男爵家で預かりアラート先生が魔力の暴発を抑えるための教育を行うことになったらしい

そうか、それで最近先生が行方不明になる事が多かったのですね

てつきり薬草辞典の面倒臭さに逃げてるのかと思ったのですが仕事だったんですね

私にも教えてくれればよかったのにい  
レニー君に会ってみたいですよ

不満タラタラに母様に訴えてみれば

「ユリアナは魔術を恐れている節があるから彼の魔術を視て余計に  
恐れを増長させてしまっではいけないからってアラート先生のご配  
慮だったのよ」

恐れを増長させる程の魔術って・・・どんだけ凄いですか？  
やっぱり1度会ってみたいですね

## 助けたい命

母様が魔術を込めた矢をそろえながら「そろそろ父様達は到着したかしら」などと話していましたがなにやら外が騒がしくなってきました

なにかあったんでしょうか？

まさかこちらに魔獣が来た・・・とか？

心配になって外の様子を見に行こうとしたら突然目の前のドアが開きサイザンさんが駆け込んできました  
いった〜い！地味にドアに鼻をぶつけました。鼻が低くなったらどうしてくれるんです

「おつ、お嬢！すまん、そんなところに立ってたのか」

鼻を押さえる私に気づいたサイザンさんがあわてて謝ってきました  
まあ、いいです。でもノックぐらいはしましょうよ

あ、サイザンさんは自警団の団長をしている方です  
唯一の王都出身者で、王都騎士団出身者なのです  
昔、父様の部下（父様が騎士団出身なのも驚きですが貴族の子息は騎士団に入団する事が多いのだそうだ）をしていて父様が領地に引っ込む時についてきたらしい  
もともと田舎暮らしに憧れていたらしくって嬉々として畑仕事をしている処をよく見かける

「伯爵夫人、伯爵より火急の手紙がまいりました。急ぎ披見願います」

サイザンさんは母様に駆け寄ると片膝をつき、手紙を掲げ差し出すさすが騎士団出身者だけあって動作は洗練されている  
普段は人の事を「お嬢」とよんでは身分の事など気にしない大雑把な人ですが自警団の皆には信頼されて人気がある

「まあ、大変。急いで男爵家に行かなくては。サイザン様、男爵家に魔獣が現れ怪我人が出ました。魔獣は旦那さまとアラート先生により捕縛されましたが怪我人はかなり危険な状態なようです。私が今からまいりますので馬の用意と護衛をお願いしますか」

伝書鳥でんしょどりを飛ばし届けられた手紙を読むと母様はあわててサイザンに男爵家へ向かう旨を伝え騎乗には邪魔になるドレスを着替える為メイドを呼び部屋を出て行ってしまいました

母様のあわてようからすると患者はかなり危険な状態にあるようです  
サイザンさんも母様と自分の騎乗する馬を用意するために厩へ向かって行きました

62

私もこのままじっとはしていただけません  
急いで診療所に向いタジル先生から増血効果のある薬草や鎮痛作用、麻酔作用のある薬草を分けてもらいます  
魔獣相手での怪我人なら出血している可能性があるのだから必要となる筈です  
母様が『癒し』の魔術を使うにしても経過で必要となる場合もあるのです

「母様、私も連れて行ってください」  
薬草靴を下げ母様の元に直談判です

「お嬢、遊びに行くんじゃないだぞ。向こうはどんな状態かわから

ないんだ。子供がついて来る処じゃない」

サイザンさんが窘めますが此処は聞き入れられません。どれだけの怪我人が出てるか分かりませんが母様だけでは対処できないかもしれないじゃないですか

タジル先生は診療所があるので連れてはいけないんですから自分が行くしかないです

じつとなんてしてられません

「サイザン様、この子を貴方の馬に乗せてもらえますか」

「しかし・・・」

「この子はきつと皆さんのお役に立ってますわ」

母様は微笑みながらもきつぱりと言い切り、私をサイザンさんの方へ促します

サイザンさんは盛大にため息をつきながらも主の命令に従い私を連れて行ってくれるようです

連れて行ってくれるのは嬉しいんですが、首根っこを捕まえて馬に乗せるのはやめてくれませんか

私、猫の子じゃないんですから、洋服で首がしまってくるしいです・

\*\*\*\*\*

男爵家では野戦病院さながらの騒ぎになっていました

父様達が到着する前に魔獣は現れたのだそうだ

大型犬の魔獣だったそうだ。男爵家では魔獣の対策が間に合わず村人の数人と男爵家の使用人の多くが怪我を負った。

そして・・・



「やはり魔獣はレニーを狙ってきました。あの子の魔力に引き寄せられたのでしょうか」

私たちを出迎えてくれた老男爵は少し疲れた表情でレニー君がいる部屋に案内してくれます

老男爵の話ではレニー君はかなりの深手を負っているようです

連れられた部屋は入った瞬間に何やら重苦しい空気を感じました

ベットで眠る男の子、きつとあの子がレニー君なのでしょう

ベットの脇にはアラート先生が、そして少し離れたところに中年の男女がひと組・・・脅えた表情で立っていました

母様はすぐにベット脇まで行くとレニー君の症状を視ます

「・・・ごめんなさい。私の力では・・・もう」

力なく首を横に振る母様の横に付き私もレニー君の状態を見ました  
レニー君は助かる状態ではありませんでした

右わき腹を魔獣に噛みちぎられたでしょう、肉がえぐれ内臓の損傷も見られます

かなりの出血もあり、いまだに息がある事の方が不思議な状態です

「もういいのです！これがこの子の運命だったんです！やはりこの子は天に還る運命だったんです！」

部屋の隅で脅えていた男性が声を上げます

きつとレニー君の両親なのです

「あんな力をもって・・・きつと生きるべき命ではなかったのです」

レニー君の両親は魔術を恐れたという、未知なる力を持つ息子を恐れていた  
だからって・・・生きてはならない命なんてない

ベットで眠るレニー君の息は荒く、出血の為か顔は真っ白だった  
覗き込むように見つめる私に気づいたかのようにレニー君は微かに  
その瞳を開けた

『イキタイ・・・シニタクナイ』

彼の青い瞳と視線が交わる時、頭に響く声が聞こえた気がした  
レニー君の声だったのかもしれない  
まだたった6年・・・生命を受けてそれだけしか生きていないのに  
こんな形で何故死ななければならぬなんて

『タスケテ・・・シニタクナイ』

助けたい・・・このまま死なせたくない  
体中に巡る己の魔力が心に反応しているのが分かる  
助けられる？助けるチカラがほしい・・・もう昔のような思いはし  
たくない

- - - - - 助けたい

「 - - - - - スキャン - - - - - 皮膚、真皮裂傷 - - - - - 小腸破損 - - - - - 」

レニー君の患部が手に取るように視えてくる・・・自分の魔力が両  
手に溢れ出てくる

母様と同じ金色の光。不思議な事なのだけどもいまならこの力の使い  
方が分かるような気がする

「 . . . . 止血 . . . . 細胞活性 . . . . 損傷部修復 . . . . 」

患部に手を当て患部付近の血流を一時凍結させ、魔力を込め細胞を活性化し急速な細胞分裂を繰り返させ欠損した小腸を再び作り上げる

「 血管及び神経修復 . . . . 破損部復元 . . . . 真皮、皮膚修復 」

ちぎれた血管、神経を慎重に修復、元の位置に繋げてゆく

内臓の時と同じように皮膚を作り上げ、見た目は元通りに戻っていた

一時止めていた血流を元通りに戻す . . . . 修復した血管からの出血は無いようだ

レニー君の顔に赤みが戻っていった。うん、呼吸も先程より良くなつて、脈もほぼ正常 . . . .

「 先生、レニー君はかなり出血しています。増血までは出来そうにないので持ってきた薬草を . . . . 」

隣にいたアラート先生にそうお願いした事までは覚えているのですが  
どうやらその直後、気を失い倒れてしまったようです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7250x/>

---

深淵に立つ癒し姫

2011年11月28日08時30分発行